

# 鹿児島県中学生の新体力テストに関する考察

田坂 裕輝 (鹿児島大学)

## 1. 目的

本研究の目的は、鹿児島県公立中学生の体力が9年間でどのように変化してきたのか、またどのような特徴があるのかを分析し、教育現場へどう活かすかを検討することである。

## 2. 研究方法

- 1) 対象者：鹿児島県公立中学校の男子生徒46829人、女子生徒45232人とした。
- 2) 調査方法：平成22年度～平成30年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査を用いて相関分析や経年変化分析を行った。
- 3) 分析方法：全国体力・運動能力、運動習慣等調査測定項目9種目及び体力合計点、身長、体重、BMIを標準化し、Pearsonの相関分析を行い比較した。

## 3. 結果と考察

### 1) 相関分析と経年変化

表1 9年間の経年変化

	向上傾向	低下傾向
男子	身長、反復横跳び、立ち幅跳び、体力合計点	握力、ハンドボール投げ
女子	20mシャトルラン、50m走、反復横跳び、長座体前屈、体力合計点	ハンドボール投げ

男子生徒、女子生徒ともにそれぞれの向上傾向項目において、強い正の相関が認められた。種目間の共通部分があるものの、水準や期間が異なることを考えると同じ地域であっても男女で異なった傾向や特徴を示した。

### 2) 追跡研究

本研究の平成25年度～平成30年度の結果と平成22年度～平成27年度の小学5年

生男女の結果を用いた。学習指導要領に則り教育を行い、鹿児島県内において教育内容や教員の指導方法は大きく異ならない。しかしながら、結果の多くは種目間の変化傾向が異なり、中学2年次の方が向上するとは限らなかった。原因の1つとして、中学校進級に伴う運動部活動への加入が考えられる。

### 3) 運動部活動との相関分析

男女に共通して、柔道部とハンドボール投げ、軟式野球部と握力に正の相関関係が認められた。その他、部活動と新体力テスト項目とに強い正の相関が認められたものがあった。従って、各部活動や体育の単元が特定の体力要素の向上に繋がるということを教員や指導者は再認識しておく必要がある。

## 4. 結論

本研究では、新体力テストの相関分析と経年変化分析により、測定項目の傾向や特徴が明らかとなった。また、中学校進級時に体力傾向が変化する1つの原因として運動部活動が挙げられる。教員や指導者は、体力向上の要因を理解して教育を行う必要がある。

## 5. 主な参考文献

- 1) 内藤久士 (2011) NSCA ジャパン第10回総会より 子どもの体力の現状と課題, 日本ストレングス&コンディショニング協会機関誌, 18 (1) : p2.
- 2) 文部科学省 (2012) 子どもの体力向上のための取組ハンドブック, p8-12.
- 3) 文部科学省 (2017) 中学校学指導要領解説 保健体育編, 東山書房.